

# 山城遺跡群 片島遺跡群

福岡県文化財調査報告書 第266集

2018

九州歴史資料館

# 山城遺跡群 片島遺跡群

福岡県文化財調査報告書 第266集

2018

九州歴史資料館

## 序

筑紫郡那珂川町は、近年の福岡都市圏の拡大に伴って都市化と人口の増加が急激に進んでおり、今年中の市制の施行が予定されているところです。しかし一方で、今回報告する2箇所の遺跡の所在する町南部の大字山田の一帯は、現在でも田園風景が広がる、山あいの緑豊かな地の景観を残しています。

この地は、歴史的には交通の要衝の地として古代以来たびたび表舞台に登場しており、これまでの埋蔵文化財の発掘調査の成果でもこの地の多彩な歴史が徐々に明らかになりつつあります。本書で報告する山城遺跡群、片島遺跡群では、縄文時代晚期以来の生活の痕跡と、ことに近世期の那珂川河畔の土地利用の一端を窺う資料が発見されています。

本書が教育、研究とともに、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

発掘調査および報告書作成にあたり、御協力いただいた方々に厚く感謝いたします。

平成30年3月31日

九州歴史資料館

館長 杉光 誠

## 例　　言

1. 本書は、那珂川床上浸水対策特別緊急事業にともなって平成 27 年度に発掘調査を実施した、筑紫郡那珂川町大字山田所在の山城遺跡群、片島遺跡群の調査の記録である。
2. 発掘調査と整理報告は、福岡県那珂川町土整備事務所の執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。
4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は小川泰樹が、また遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は東亜航空技研株式会社に委託した。
5. 本書に掲載した遺構図の作成は小川、川述昭人が行い、発掘作業員が補助した。  
遺構図のうち石垣部分は株式会社日航コンサルタントに委託した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において実施した。
7. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した周辺遺跡分布図は国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「福岡南部」「不入道」を加筆改変したものである。また、本書に掲載した調査区位置図は、那珂川町が作成した 1/2,500 地形図を加筆改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
9. 本書の執筆・編集は小川が担当した。

## 本文目次

I	はじめに .....	1
1	調査に至る経緯 .....	1
2	調査の組織 .....	2
II	位置と環境 .....	2
III	調査の内容 .....	5
1	山城遺跡群 .....	5
1)	調査の概要 .....	5
2)	遺構と遺物 .....	6
3)	小結 .....	19
2	片島遺跡群 .....	20
1)	調査の概要 .....	20
2)	遺構と遺物 .....	21
3)	小結 .....	26
IV	おわりに .....	27

## 図版目次

- 図版 1 1 山城遺跡群遠景(西上空から)  
2 山城遺跡群全景(上空から)
- 図版 2 1 トレンチ掘削状況(西上空から)  
2 1 トレンチ上半部(北から)  
3 1 トレンチ上半部土層(北から)
- 図版 3 1 1 トレンチ下半部土層(西から)  
2 2・3号トレンチ(上空から)  
3 2 トレンチ土層(北から)
- 図版 4 1 2 トレンチ石垣周辺土層(西から)  
2 3 トレンチ(北東から)  
3 3 トレンチ土層(北西から)
- 図版 5 1 3 トレンチ石垣周辺土層(北西から)  
2 4 トレンチ(北から)  
3 4 トレンチ土層(北西から)
- 図版 6 1 4 トレンチ石垣前面土層(北西から)  
2 4 トレンチ石垣背面土層(南西から)  
3 4 トレンチ石垣周辺土層(東から)
- 図版 7 1 石垣全景(東上空から)  
2 石垣全景(北上空から)  
3 1・2号石垣(北上空から)
- 図版 8 1 1号石垣(北から)  
2 3号石垣東半部(北上空から)  
3 3号石垣西半部(北上空から)
- 図版 9 1 I区拡張部2号石垣(北西から)  
2 I区拡張部2号石垣(北東から)  
3 II区拡張部2号石垣(東から)
- 図版 10 山城遺跡群出土遺物①
- 図版 11 山城遺跡群出土遺物②
- 図版 12 山城遺跡群出土遺物③
- 図版 13 山城遺跡群出土遺物④
- 図版 14 山城遺跡群出土遺物⑤
- 図版 15 山城遺跡群出土遺物⑥
- 図版 16 山城遺跡群出土遺物⑦
- 図版 17 山城遺跡群出土遺物⑧

図版 18 1 片島遺跡群遠景（南東上空から）

2 片島遺跡群遠景（東上空から）

図版 19 1 北西半部全景（南西から）

2 北西半部全景（北東から）

3 南東半部全景（南西上空から）

図版 20 1 南東半部全景（北西上空から）

2 1号掘立柱建物跡（南西上空から）

3 1号掘立柱建物跡柱掘方土層①

図版 21 1 1号掘立柱建物跡柱掘方土層②、P 8

2 1号土坑（西から）

3 1号土坑土層（北西から）

図版 22 1 2号土坑（北から）

2 2号土坑土層（南から）

3 2～4号溝（北から）

図版 23 片島遺跡群出土遺物①

図版 24 片島遺跡群出土遺物②

## 挿図目次

第 1 図	那珂川町の位置	1
第 2 図	周辺遺跡分布図(1/25,000)	4
第 3 図	山城遺跡群遺構配置図(1/200)	折込
第 4 図	山城遺跡群調査区位置図(1/5,000)	5
第 5 図	I 区石垣・II 区石垣東半部実測図(1/100)	7
第 6 図	II 区石垣西半部・III 区石垣実測図(1/100)	8
第 7 図	I 区石垣前面埋土出土遺物実測図①(1/3)	10
第 8 図	I 区石垣前面埋土出土遺物実測図②(1/3)	11
第 9 図	II・III 区石垣前面埋土出土遺物実測図(1/3)	12
第 10 図	遺物包含層出土遺物実測図①(1/3)	14
第 11 図	遺物包含層出土遺物実測図②(1/3)	16
第 12 図	縄文時代遺物実測図①(1/3)	17
第 13 図	縄文時代遺物実測図②(1/2)	18
第 14 図	片島遺跡群調査区位置図(1/5,000)	20
第 15 図	片島遺跡群遺構配置図(1/300)	折込
第 16 図	1 号掘立柱建物跡実測図(1/60)	21
第 17 図	1・2 号土坑実測図(1/60)	22
第 18 図	片島遺跡群出土遺物実測図①(1/3)	24
第 19 図	片島遺跡群出土遺物実測図②(1/3)	26

# I はじめに

## 1. 調査に至る経緯

那珂川は、福岡、佐賀県境にある背振山を源流として、佐賀県吉野ヶ里町、福岡県那珂川町、春日市、福岡市を流下して博多湾に注ぐ、幹川流路延長 35.2km、流域面積 124.0km<sup>2</sup>の二級河川である。

平成 21（2009）年 7 月の中国・九州北部豪雨によって、床上浸水、床下浸水合わせて 301 戸の甚大な被害を受け、また那珂川町役場や国道 385 号などが浸水したことで都市機能が一時低下した。那珂川流域では、他に昭和 28 年、38 年、48 年、55 年、平成 15 年等にも洪水被害が発生しており、民生安定、社会経済上重大な影響を及ぼしている。

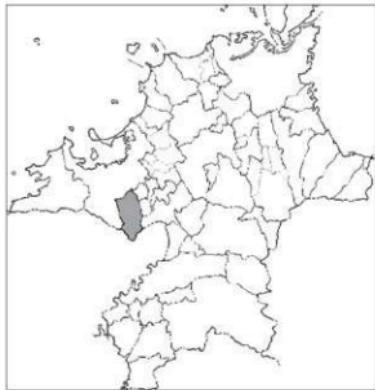
このため、福岡県は平成 22 年度から床上浸水対策特別緊急事業に着手し、河道掘削、護岸工、築堤工、堰の改築、橋梁架替、橋梁補強等の河川整備を行い、五ヶ山ダムの整備と合わせて、被害の再発防止を図っている。

埋蔵文化財に関する協議は、平成 23（2011）年 6 月から、福岡県那珂川土整備事務所と那珂川町教育委員会文化振興課との間で始まり、埋蔵文化財の取り扱いと、試掘・確認調査および発掘調査の時期と方法について、継続して協議を重ねた。これを受けて町教育委員会では、平成 24 年度以降、調査可能な箇所から試掘・確認調査を順次行っている。

発掘調査については、事業の進捗と用地の取得と現地の耕作等の状況から、26 年度以降でないと着手できない見通しであったが、町単独では期限内に調査を終了することが不可能であるとの判断から、平成 26 年 2 月からは福岡県教育庁総務部文化財保護課が、4 月以降は九州歴史資料館も加わっての協議となった。その結果、町教育委員会によって実施された試掘調査で埋蔵文化財の存在が確認された地点のうち、山城遺跡群の一部と、片島遺跡群部分については九州歴史資料館が、それ以外を町教育委員会が、それぞれ担当して発掘調査を実施することになった。

九州歴史資料館では、暫定堤防の完成以降の、現地での条件の整った平成 27 年 9 月から発掘調査を開始した。

本書は、平成 27 年 9 月から 28 年 3 月まで発掘調査を実施した山城遺跡群及び平成 27 年 12 月から平成 28 年 3 月まで実施の片島遺跡群の、筑紫郡那珂川町大字山田所在の 2 箇所の遺跡についての調査報告である。



第 1 図 那珂川町の位置

## 2. 調査の組織

発掘調査（平成 27 年度）および整理・報告書作成（平成 29 年度）の関係者は次のとおりである。

平成 27 年度

平成 29 年度

### 九州歴史資料館

#### 総括

館長	杉光 誠	杉光 誠
副館長	伊崎俊秋	飛野博文
総務室長	塩塚孝憲	田嶋朋子
文化財調査室長	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査室長補佐		伊崎俊秋
文化財調査班長	秦 憲二	秦 憲二
庶務		
総務班長	中村満喜子	中村満喜子
事務主査	宮崎奈巳	林田朋子
	西村知子	
主任主事		原野貴生
		秦 健太

#### 主事

調査・整理・報告	秦 健太	
参事補佐	小川泰樹	小川泰樹
調査補助員	川述昭人	

## II 位置と環境

那珂川町は、福岡県中西部に位置し、北と西は福岡市に、東は春日市、大野城市、筑紫野市に、南は佐賀県鳥栖市、三養基郡みやき町、神崎郡吉野ヶ里町にそれぞれ接している。町域は南北に長く、北部は福岡市と一体となって市街地を形成して都市化が進んでいるが、一方で中南部は大半が脊振山地の北斜面となっており、豊かな自然と昔ながらの田園風景に恵まれている。町名の由来ともなっている那珂川は、脊振山に源を発し、中流域に形成された谷底平野は今回調査を実施した山田周辺では比較的広がっているが、安徳台で遮られる形で一旦狭められ、以北は大きく開けて福岡平野を北流し博多湾に注いでいる。

町の面積は 74.95km<sup>2</sup>で、人口約 5 万人。明治 29(1896) 年に統合された筑紫郡のうち安徳、岩戸、南畑の 3 村が昭和 31(1956) 年 4 月に合併して町制を施行した。平成 27(2015) 年の国勢調査で人口 5 万人を突破したことから、今年 10 月 1 日の市制施行を目指している。

今回、調査を実施した那珂川町大字山田から安徳台にかけての地区は、伝説・伝承と歴史が混然となった地といえる。地形的には脊振山の山間を北流する那珂川が、この辺りから大きく開けて福岡平野の一角を形成しており、山田は一見その扇の要にあたる位置のようであるが、実際には北側を安徳台の丘陵で塞がれていて、いわば閉塞した空間となっている。周囲がほぼ花崗岩類の山地であるなかで、この丘陵は阿蘇4火碎流の堆積物で形成されているという。

山田の平地では、縄文時代には後・晩期の堅穴住居跡20軒以上を検出した山田西遺跡群があるが、弥生時代になると断片的に遺物が出土する程度で、これまでのところまとまった遺構が発見されていない。一方、安徳台遺跡群では、弥生時代中期～後期初頭までの大型建物を含む堅穴住居跡130軒以上と、中期の甕棺墓群を確認しており、うち2号墓からは塞杆状製品を含む豊富なガラス製品、ゴホウラ製貝輪43点以上、鉄剣、鉄戈が出土している。また、これに北接する安徳原田遺跡群では埋納された状態で広形銅矛12口が明治27(1894)年に発見されているなど、奴国を構成する有力集団の集落がここに存在したことを示すとともに、安徳台を福岡平野の最奥として意識していた様子が窺える。この傾向は古墳時代になっても続き、安徳台以北は、安徳大塚古墳を始めとして多くの古墳、遺跡が濃密に展開するのに対して、以南では、山城遺跡群北側丘陵にある松尾古墳群が町内の古墳の南限であり、ほぼ皆無の状況といえる。

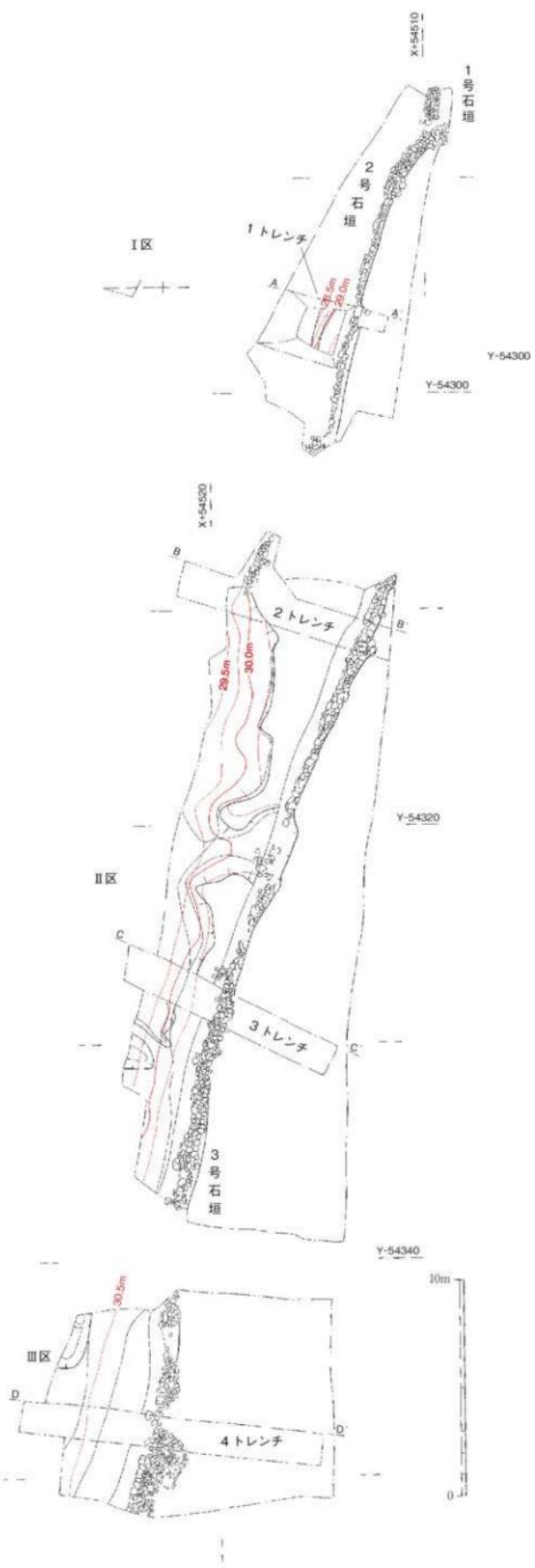
一方でこの地は、神埼方面から坂本峠を越えて博多方面に至る南北の道と、大宰府方面から小笠木峠を越えて早良・怡土方面に至る東西の道の交差する、交通の要衝の地でもある。裂田溝は、那珂川の水を山田の一の井手より取水して、那珂川本流とは対反の安徳台東側の狭窄部を通して下流に流すことで計約250haを灌漑する、現在にまで続く延長約5kmに及ぶ人口の用水路で、『日本書紀』『神功皇后』条の記載に比定することが、既に江戸時代の『筑前国続風土記』等の地誌類に見られる。総合調査の結果では、開削時期は必ずしも明瞭でないものの、中・近世を通して度々修復されて今日まで利用してきた様子が確認されている。奈良時代には、別所次郎丸遺跡で畿内系土師器、墨書き土器等を含む多量の官衙あるいは寺院的な遺物が出土しており、安徳台遺跡群でもこれに近い時期と考えられる大型の掘立柱建物跡が確認されている。またここは、平安時代末には原田種直の館があり、一時期安徳天皇の行宮になったとの伝承が『源平盛衰記』等にあり、「安徳」の地名の由来ともされるが、現在までの発掘調査成果では関連の遺構等は検出し得ておらず、歴史的にはいまだ未確定といえる。

周囲には多くの山城があり、岩戸城（龍神山城）、老林城がこの地を見下ろす位置にあるが、ことに岩戸城は平安時代末に築城が開始されたともいわれ、少なくとも元寇の前後には大宰府とともに北部九州の軍事拠点として最重要視されていたという。それは弘安8（1285）年に霜月騒動に端を発した武藤經資・景資兄弟の岩戸合戦の舞台となったことでも知られる。その後も戦国期まで、今川了俊・大内氏・筑紫氏等、主を変えながら長期間使用されてきたことが一次史料で散見することができる、城郭史研究上でも貴重な城といえる。

このように、伝説・伝承も取り混ぜて日本史の表舞台にも時に登場してきたこの地も、江戸期以降になると山間の豊かな田園風景が広がる村落であったことが、先述の地誌類によつても窺うことができる。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 山城遺跡群遺構配置図(1/200)

### III 調査の内容

#### 1. 山城遺跡群

##### 1) 調査の概要

山城遺跡群の今回の調査地点は、筑紫郡那珂川町大字山田 1135 に所在する。北流する那珂川が丘陵に連られてほぼ直角に屈曲して東に流れを変える位置の右岸に立地し、現地は現在に至るまで水田として利用してきた。

平成 26 年 11 月 21 日に那珂川町教育委員会が実施した試掘調査の結果に基づいて調査範囲を決定した。調査面積は約 700m<sup>2</sup>、調査期間は平成 27 年 9 月 4 日～平成 28 年 3 月 30 日。

平成 27 年 9 月 4 日に現地に重機を搬入して表土掘削作業を開始、既にできている暫定盛土を避けて北側を掘り下げた。調査区は東西方向に約 65 m と長く、途中 2 箇所は南側の水田からの排水施設が存在するために掘削することができず、これを境として東側から I ～ III 区とした。9 月 25 日からは作業員による遺構検出作業を行った。平面観察では、中央部に露出している灰色～暗灰色土と川原石が並んで露出している部分が、東西方向に延びる溝状遺構と考えられた。当初その箇所を掘り下げ始めたところ、埋土全体が北に向かって低く傾斜して



第4図 山城遺跡群調査区位置図 (1/5,000)

いく状況が確認された。そこで、調査区東端の一部を区切って地山まで掘り下げてみると、石垣と北側に急激に落ちる地形を検出した。そのため、調査区全体に4箇所のトレーニングを設定して確認作業を行った。結果、場所によって積み方が違っているものの、調査区全域に東西方向に延びる石垣を検出し、その北側は地形が2~3m低くなり、2~4トレーニングでは川原石が露出している状況が確認できた。これらの石垣の方向が、すぐ北側を流れる現在の那珂川に対応していることからも、往時の那珂川の護岸の石垣と、川原あるいは川床の一部を検出したものと判断することができた。

12月9日にトレーニング掘削状況の空中写真撮影、平成28年1月28日から再び重機を入れて、石垣より北側部分の掘り下げを行い、2月8日から手作業で調査区全域の石垣の検出作業を開始した。石垣前面の調査がほぼ終了した3月3日、石垣の写真測量と空中写真撮影を実施し、この日から石垣内側の遺物包含層掘り下げを開始した。17日には現地での調査が終了、23日から重機による埋め戻し作業を行った。

## 2) 遺構と遺物

### 石垣

今回の調査では、那珂川の旧河川の一部と、これに伴う護岸のためと考えられる石垣を、調査区のほぼ全面で検出した。石垣は、すぐ北側の現在の那珂川の流れの方向とほぼ並行した東西方向に並び、今回の調査区の全域に及ぶが、全てが繋がっている訳ではなく、一部が重複した3列に分かれている。合計で延長約70m分を確認した。石垣は場所によって多少の積み方の相違が認められるが、全体的に手近な20~40cm程度の自然石川原石を、1~8段程度、比較的乱雑に野面積みしている。

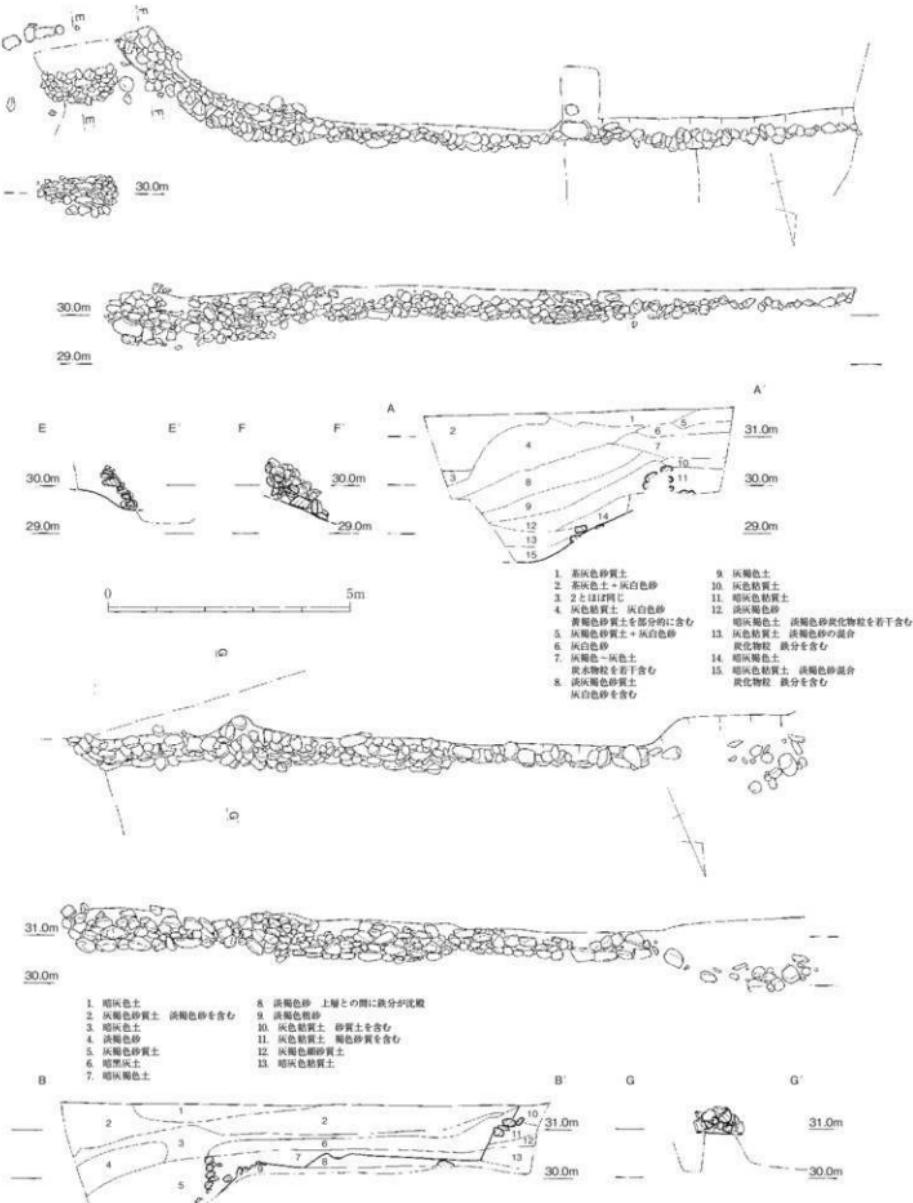
#### 1号石垣（図版7・8、第5図）

調査区の東隅部で約1.5m分を検出した。20cm程度のものを中心に10~40cm大の川原石を5~6段、高さ0.8mで、約55°の比較的急勾配に野面積みする。2号石垣との関係は、調査区隅部で、しかも現地表面から3m以上掘り下げた箇所で危険でもあったために、充分に確認することはできなかったが、湾曲して南側の調査区外に延びる2号溝の東端部前面に接して築かれていることから、これの継ぎ足し或いは補修と推測できる。

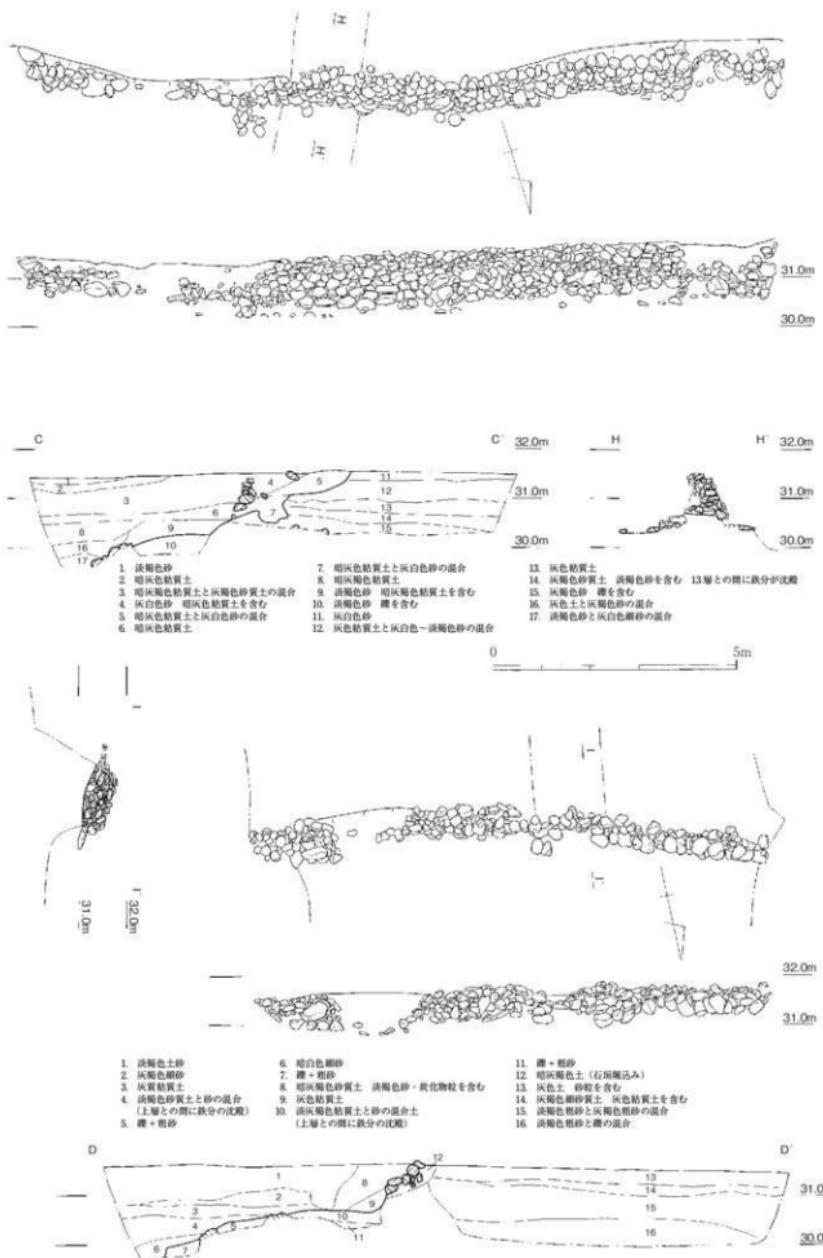
#### 2号石垣（図版7・9、第5図）

I区から一部II区にかかる範囲で検出した。当初は、I区の東隅部付近から西端部までの約15m分のみを確認していたが、未調査部分約7mを挟んでII区で検出した3号石垣とは石列の方向にずれがあった。そこで、石垣の写真測量と空中写真撮影が終了した後にサブトレーニングを設定して、2・3号石垣の関係を確認した。その結果、2号溝はI区西端部からやや北側に屈曲して西側にIII区北東隅部まで延びて、川原石が露出した落ち部分に繋がっていた。II区東端部付近では2・3号石垣は一部が重複してほぼ平行して並んでおり、両者の間隔は約5mである。

今回の調査区内で最終的に確認した2号石垣は、未調査部分を挟んで長さ約24mで、I区



第5図 I区石垣・II区石垣東半部実測図 (1/100)



第6図 II区石垣西半部・III区石垣実測図 (1/100)

西端部と東端部付近の2箇所でやや屈曲して並ぶ。10cmから最大60cm大の川原石を、東側では6段程度で高さ1.1mに乱雜に野面積みしており、西側に徐々に低くなっている。1トレンチでは石垣前面は急傾斜で北側に低くなっている。根石下端部から1.5m、現地表面からは3.0mの深さで平坦面をわずかに確認した。

### 3号石垣（図版8、第5・6図）

II区南東隅部からIII区西端部まで、II・III区境の未調査部分を挟んで約45m分を確認した。石垣列は、わずかに湾曲しており、途中3箇所ほどで崩れた痕跡がある。1・2号石垣と同様、10～60cm大の自然石川原石を使用して、最大高1.1m、3～4段から6～7段乱雜な野面積みで築く。箇所によって、根石に大きめの石を配する、逆に上部の石が大きい、全て小振りの石、など積み方にも相違がある。石垣背面は、3・4トレンチでは掘り込みがあるが、裏込めに石材は使用しておらず、2トレンチでは構築時の掘り込みを確認できなかった。石垣前面は、根石下部に地山を削る高さ20～30cmの段を持ち、その下場から最大幅5mの平坦部があり、川原石が露出した落ちに繋がる。

### 出土遺物

#### I区石垣前面埋土出土遺物（図版10～12、第7・8図）

1～3は須恵器。1は口縁部下面にかえりを有する蓋。2・3は高台のある壺で、3の復元高台径9.0cm。

4～9は土師器。4は皿で、底部は糸切り、復元口径8.0cm、復元底径6.0cm、器高1.5cm。5～8は壺で、底部は糸切り後に板状圧痕が残る。8が復元口径16.0cm、復元底径12.0cm、器高2.8cm。9は高台付きの椀で、底部には板状圧痕が認められる。復元高台径8.0cm。

10は黒色土器椀の体部で、内面のみ撲。

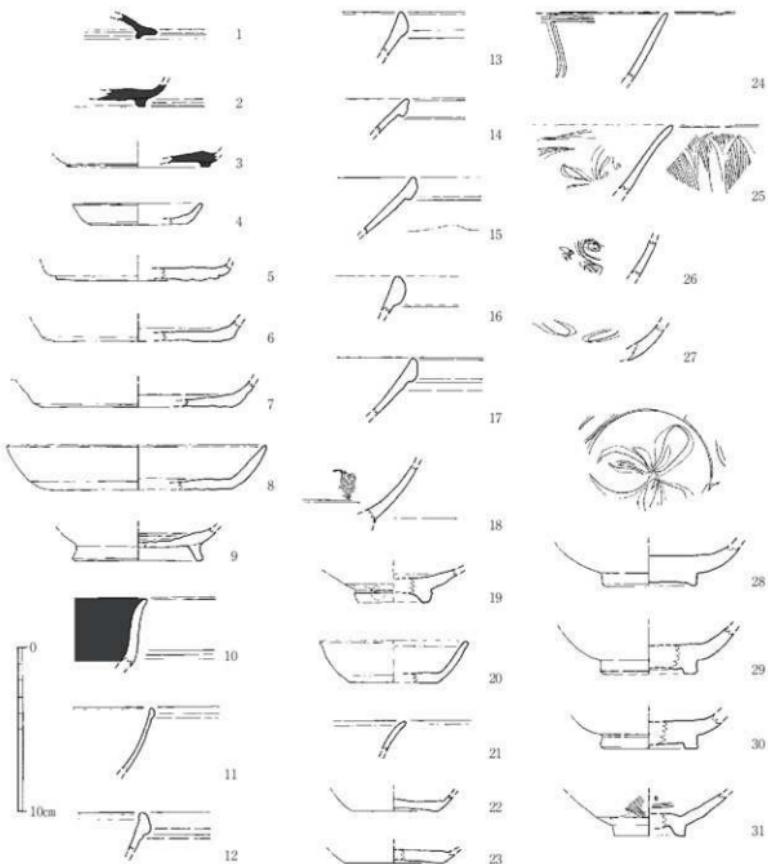
11～23は白磁。11～19は椀で、11～17は口縁部が玉縁状になる。11は玉縁が小さく、その他は比較的大きい。11・14～17は胎土が白色で硬質、釉は背味がかった白色で、15は体部外面下部が無釉となる。12・13は胎土・釉ともに黄灰色でやや軟質である。18は体部内面に櫛目文がある。19は見込の釉を輪状に掻き取り、また高台部は無釉。復元高台径4.4cm。20～23は皿。20・21は口禿で、20は体部から底部も無釉。復元口径9.2cm、復元底径5.6cm、器高2.6cm。一方、22・23は底部外面にまで釉がかかること。

24～31は青磁椀。24～30は龍泉窯系で、24は割花文で口縁部は輪花になる。25は内面草花文、外面は鎧蓮弁の上に櫛目文。26の内面は飛雲文であろうか。27・28は内面草花文で、28は底部が厚い。29・30も底部が厚く、高台疊付部以内が露胎である。31は同安窯系で、内外面に櫛目文があり、体部下位は露胎となる。

32～43は肥前系の磁器である。32～35は椀。32・34は胎土が黄灰色でやや陶質を呈する。32は復元口径9.6cm。33は体部が直線的な廣東椀で、外面には格子文、復元口径11.0cm。35は、復元高台径4.0cm。36はやや深い皿で、胎土は灰色、見込の文様は紗綾形。37は小椀。体部外面は赤色で文様を描き、見込は露胎で黒色で鰯を描き、背鰭・尾鰭には紫色釉で着色する。高台径3.2cm。38・39は盃で、38は染付で高台径2.6cm、39は黄褐色の透明釉をかけ、

復元高台径 3.0cm。40 は蓋で、口縁部下面是無釉、外面には蜻唐草文。復元口径 8.0cm。41・42 は型押しの合子で、貝文様の 42 は受部を有する。43 は段重のミニチュアであろう。口縁部と段部の重なる部分は露胎。外面は上下の画線の間に赤色で綾杉文を描く。復元口径 5.0cm。

44～53 は陶器で、44～47 は椀。44 は胎土が灰白色の磁器質で、内外面に薺灰釉をかける。復元口径 13.0cm。45 は褐釉。46 は透明釉で、復元口径 10.0cm、高台径 4.0cm、器高 5.4cm。47 は露胎で、高台径 4.2cm。48 は皿で、器壁は薄く、口縁部は外反して平坦面をつくり端部は跳ね上げる。白色釉を薄くかける。49 は蓋で、外面となる上面のみ白色釉をかけ、黒色で圓線と文様を描く。復元口径 5.8cm、外径 9.8cm。50 は摺鉢で、全面に褐色釉をかける。51～53 は甕で、51 の外面は白化粧土の上に松を描く。52・53 は無釉で、52 は赤褐色、53 は黒褐



第7図 I区石垣前面埋土出土遺物実測図① (1/3)

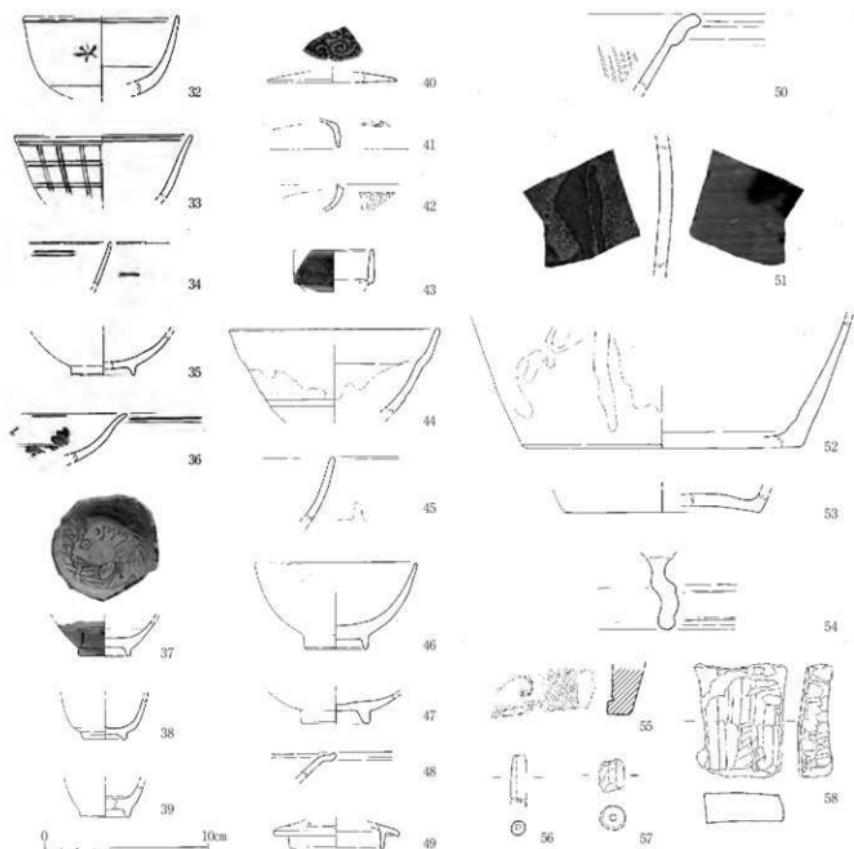
色を呈する。

54は火鉢等の脚部で、土師質である。上端部には粘土貼り付けのための櫛状工具を使用した回転刻みが残る。また、下端部から内面に煤が付着している。55は平瓦の頸部で、焼成は軟質、上部には粘土貼り付けのための刻みの痕跡が残る。文様は型押しの唐草文。56・57は土錘で、ともに破片であるが、56は径0.9cm、57は1.6cm程度。

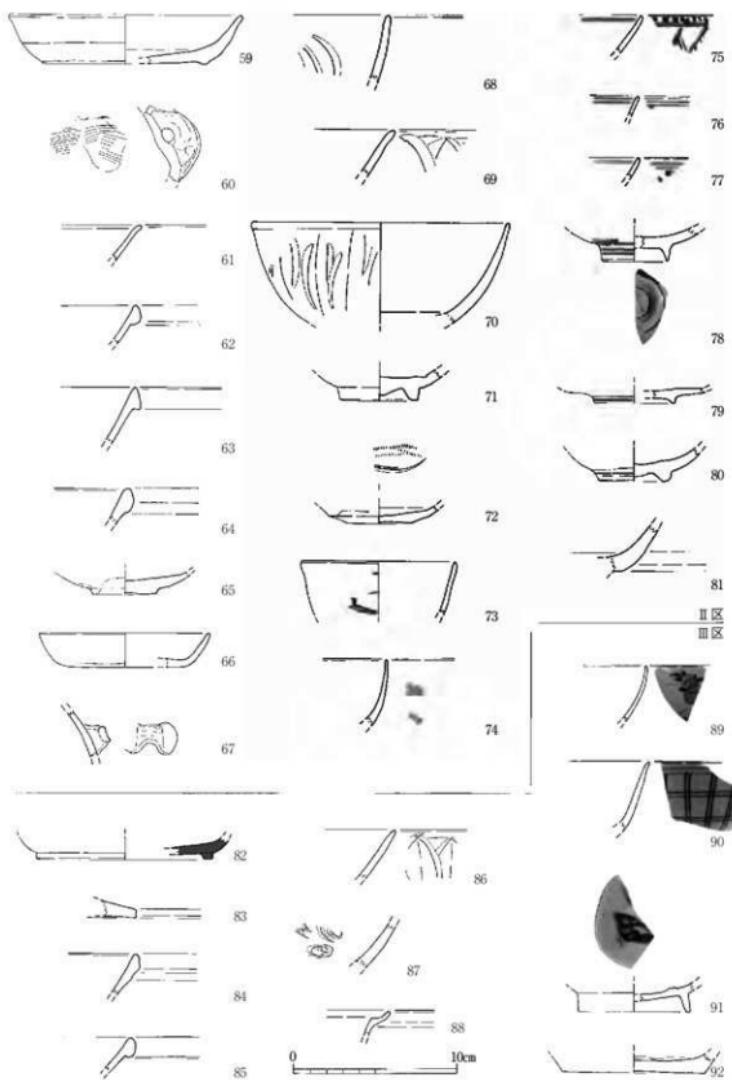
58は滑石製石鍋であるが、破片の断面を削っており再加工品である。

## II区石垣前面埋土出土遺物（図版12～14、第9図）

59は土器器坏で、底部は板状圧痕の後にさらにナデている。復元口径14.4cm、復元底径



第8図 I区石垣前面埋土出土遺物実測図② (1/3)



第9図 II・III区石垣前面埋土出土遺物実測図 (1/3)

10.2cm、器高 3.0cm。60 は釜の鋸付部で土師質、棒状の工具で孔を穿つ。内面はハケメ状のナデ調整。

61～67 は白磁で、61～64 は椀。61 は口縁端部をわずかに外反させる。62～64 は口縁部に玉縁を有する。65・66 は皿で、ともに胎土は灰色だが、釉は 65 が黄白色、66 が青白色。

65 の外面下位は露胎で、底部に円板状の段を有し、ヘラ状工具の痕跡が残る。底径 4.2cm。

66 は底部外面のみ露胎で、復元口径 10.6cm、器高 2.1cm。67 は四耳壺の肩部で、釉調は緑灰色だが白磁であろう。

68～72 は青磁で、68～71 は龍泉窯系の椀、72 は同安窯系の皿である。68 は内面に草花文か。69・70 は外面に片彫りの蓮弁文を有する。71 は底部で、外面は露胎、内面見込部に砂が多く付着する。高台径 5.1cm。72 は皿で、外面下位は露胎。見込部には櫛状工具による文様と点描文を描く。

73～79 は染付で、73～78 は椀。73 は体部が直線的で、復元口径 9.6cm。外面には海浜山水文を描く。74 の文様は松か。75 は列点文の下に鋸歯文、76～78 は破片のため不明。78 は高台が幅狭く、外底面に退化した文字と思われるものが書かれている。79 は高台が貧弱で復元径 5.0cm。底部が平らになり、蓋物等ではないか。

80・81 は陶器椀で、80 は復元高台径 4.3cm。80 は胎土が灰褐色、釉は緑灰色、81 は胎土が白黄褐色、釉はやや白色がかった透明釉である。

### III区石垣前面埋土出土遺物（図版 14、第 9 図）

82 は高台のある須恵器坏で、復元高台径 11.0cm。

83 は瓦質土器釜の羽部分で、一部煤が付着している。

84・85 は口縁部が玉縁状になる白磁椀である。

86・87 は青磁椀で、86 は外面に蓮弁文、87 の内面は飛雲文であろうか。88 は青磁皿で、口縁部が屈曲して外反し、端部を上げる。釉は青緑色で厚く、貫入が認められる。

89～91 は染付。89・90 は椀で、89 は外面に花文を描く。90 は第 8 図 33 とほぼ同様の製品である。91 は高台が大きく高く、復元径 7.0cm で、鉢等ではないか。透明釉が厚くかかり、貫入が認められ、見込の文様は花文か。

92 は陶器壺の底部。外面は露胎、内面は褐色釉の上に部分的に黒色釉がかかる。復元底径 8.8cm。

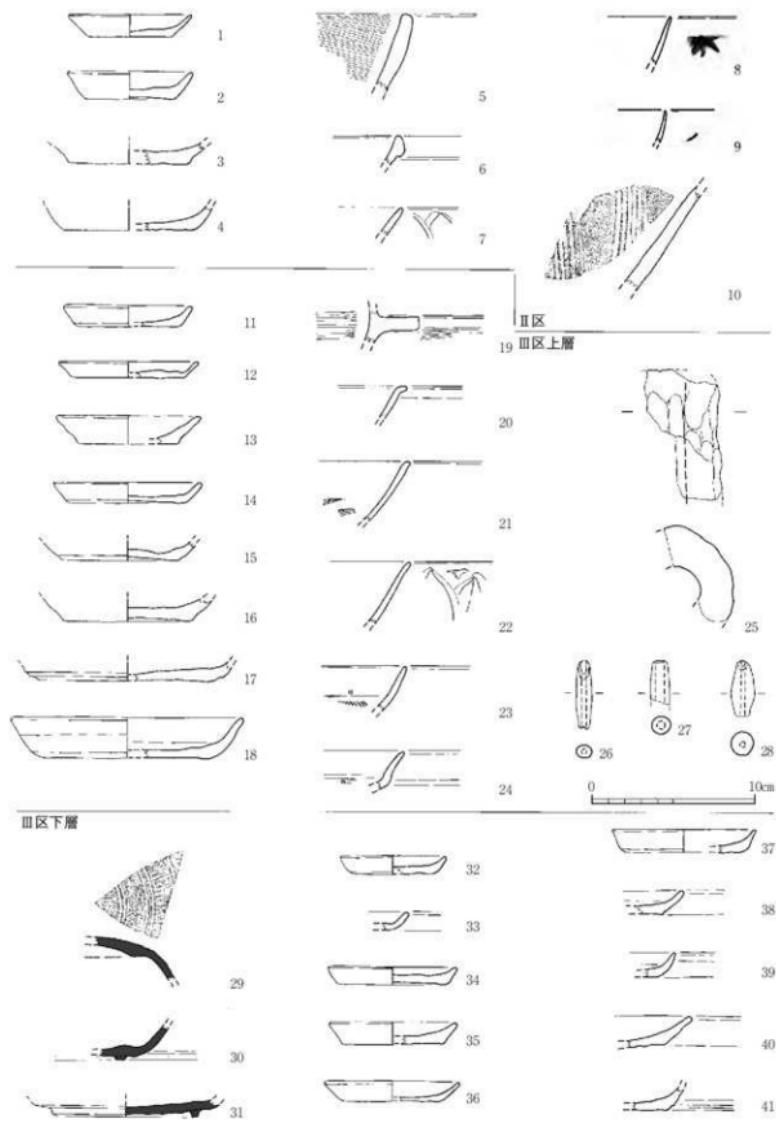
### 遺物包含層

石垣の背面にあたる I～III 区の南半部は那珂川の堆積作用によって形成された沖積地で、各層が遺物包含層となっている。場所によって多少の相違はあるが、概ね上層から、灰色粘質土あるいは灰白色砂、灰褐色砂質土、淡褐色砂の順で検出した。

### 出土遺物

#### II 区包含層出土遺物（図版 14・15、第 10 図）

1～4 は土師器。1・2 は皿で、底部は糸切り、1 は復元口径 7.6cm、復元底径 5.0cm、器高 1.4cm、2 は復元口径 7.8cm、底径 5.6cm、器高 1.7cm。3・4 は坏で、底部は糸切り、3 は復元底径 7.6cm、4 は復元底径 8.0cm。



第10図 遺物包含層出土遺物実測図① (1/3)

5は土師質土器の鍋で、外面はナデ調整、内面は横方向のハケメ調整。外面上位に煤が付着し、内面下位には煤状の炭化物が付着する。

6は白磁椀で、口縁部が玉縁状となる。

7は青磁椀で、外面に片彫りの蓮弁文を有する。

8・9は磁器椀で、8は竹文であろう。

10は備前系の摺鉢で、硬質で内外面とも無釉。6本一単位の櫛歯を配する。

### Ⅲ区包含層（灰色～灰褐色土層）出土遺物（図版14・15、第10図）

Ⅲ区遺物包含層の上層から出土した。11～18は土師器。11～14は皿で、底部は糸切り、12・14には板状圧痕が残る。復元口径8.0～9.2cm、復元底径6.2～7.2cm、器高1.0～1.7cm。15～18は坏で、底部は糸切り、16・17には板状圧痕が認められる。

19は瓦質土器釜で、内面と外面の一部にハケメ調整痕が残り、羽部下面には煤が付着している。

20・21は白磁椀で、口縁部は外反して上部に平坦面をつくる。21は体部内面に櫛目文がある。

22は龍泉窯系青磁椀で、外面には鏤蓮弁文を有する。23・24は同安窯系青磁皿で、見込に櫛点描文が認められる。

26～28は土錘で、26は最大径1.0cm、27は1.2cm、28は長さ3.4cmで最大径1.4cm。

### Ⅲ区包含層（淡褐色粗砂層）出土遺物（図版15・16、第10・11図）

Ⅲ区遺物包含層の下層から出土した。29は須恵器の蓋であろう。外面は沈線の間に櫛描きの簾状文と羽状文で埋める。30・31は高台のある坏で、31は焼成がやや不充分で軟質である。復元高台径9.0cm。

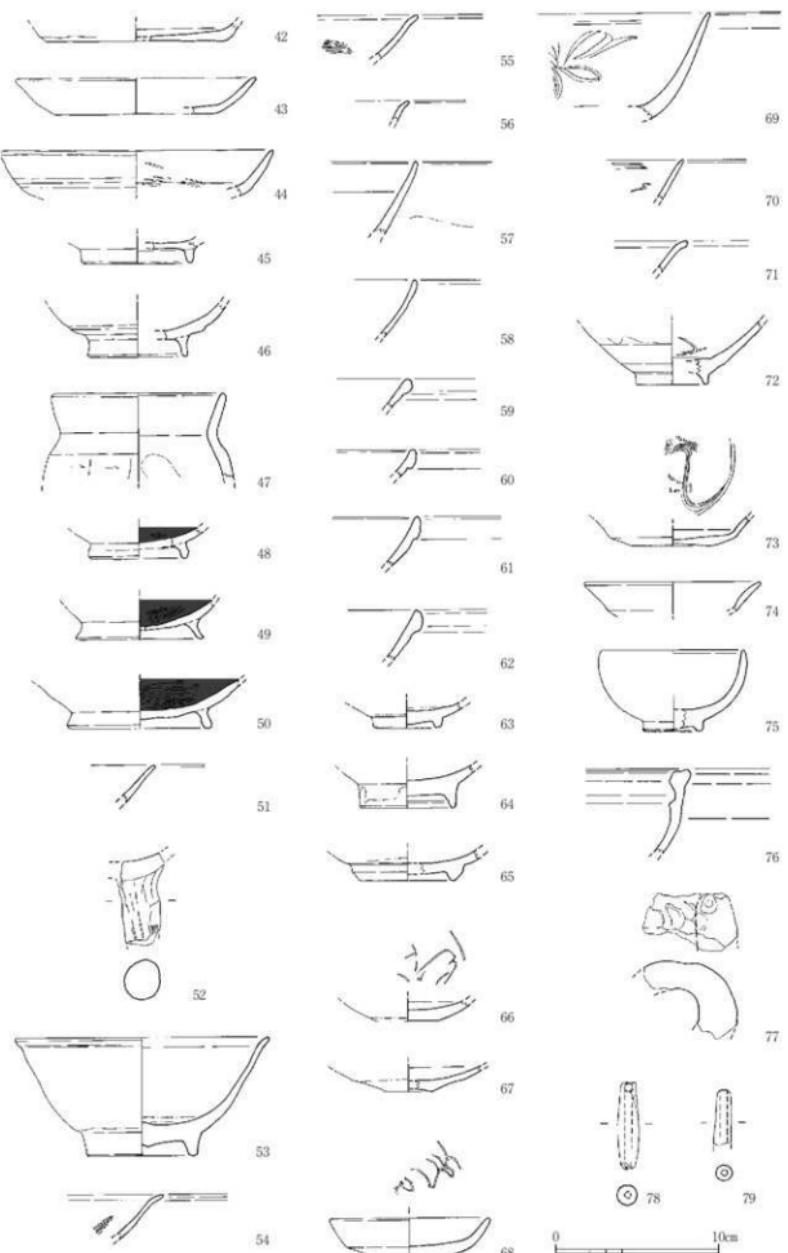
32～39は土師器皿で、全て底部は糸切りだが34・36には板状圧痕が残る。復元できるものでは、復元口径6.6～9.0cm、復元底径5.1～7.7cm、器高1.1～1.5cm。40～44は坏で、40～43は糸切り、40・41には板状圧痕が残る。43は復元口径15.0cm、復元底径10.0cm、器高2.2cm。44は胎土が精良で白黄色を呈し、底部はヘラ切りで、内面にはミガキの痕跡が残る。復元口径17.0cm。45・46は高台付きの椀。46は焼成がやや瓦質で、高台が低く復元高台径7.0cm。46は軟質で高台は比較的高く復元高台径6.2cm。47は小型の土師器甕で、内外面ヨコナデ調整の後体部外面はケズリ調整を行う。復元口径10.8cm。

48～50は黒色土器で3点とも内面のみ焼し、ミガキ調整で仕上げる。48は焼成が瓦質、48・49は外底部に板状圧痕が残る。（復元）高台径は、48から順に6.3cm、8.0cm、9.0cm。

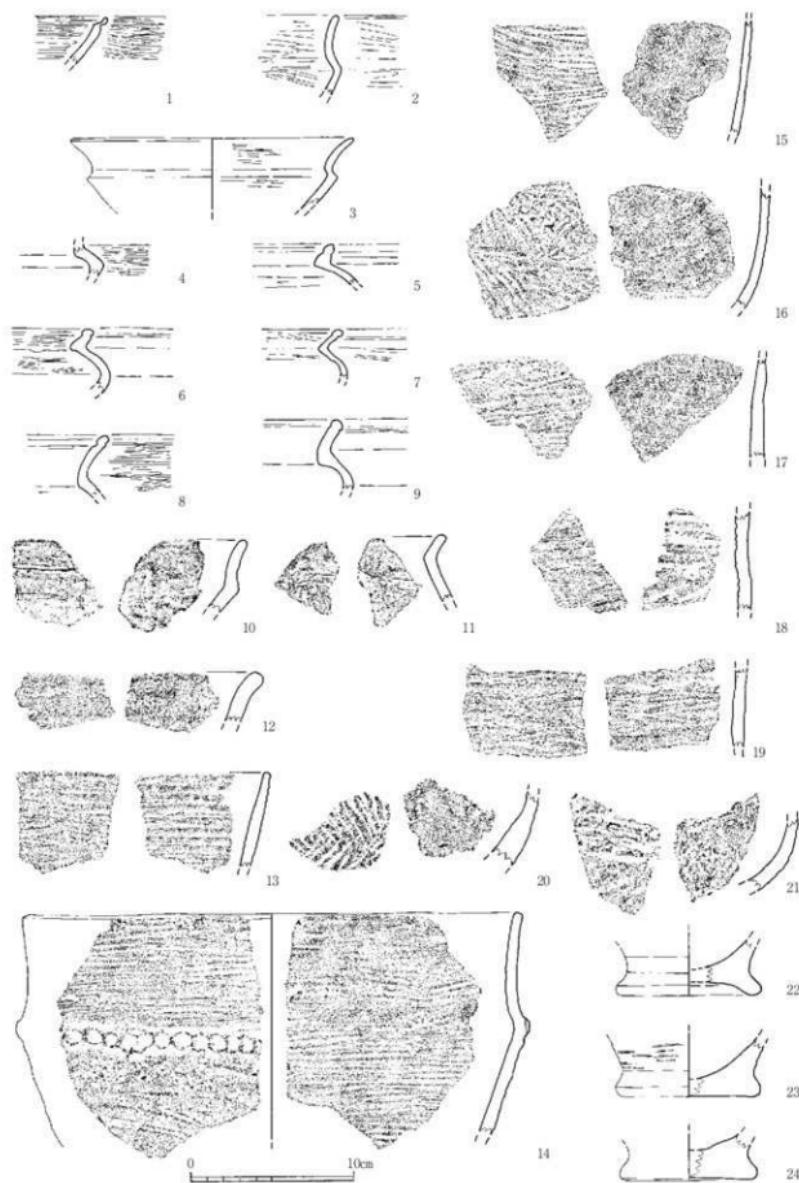
51は瓦質土器椀で、口縁部内外面に重ね焼きの痕跡が残る。

52は土師質土器鍋の脚であろう。手捏ねで、最大径2.2cm。

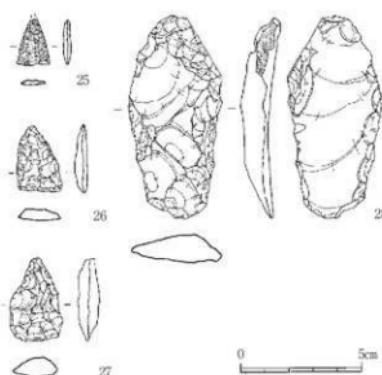
53～68は白磁で、53～65は椀である。53～56は口縁部が外反し、53は体部との境内外面に段を持ち、また見込は輪状に釉を掻き取り、外面は高台部付近以下は露胎である。復元口径15.8cm、高台径6.9cm、器高7.3cm。54・55は内面に櫛目文が残る。57・58は直口縁で、57は内面にわずかな段があり、体部外面下半部は露胎。59～62は玉縁状の口縁部のもの。63～65は底部で、63・65は内面の釉を輪状に掻き取り、63には重ね焼きの痕跡が明瞭



第11図 遺物包含層出土遺物実測図② (1/3)



第12図 繩文時代遺物実測図① (1/3)



第13図 繩文時代遺物実測図② (1/2)

cm。73・74は青磁皿で、73は龍泉窯系、74は同安窯系と思われる。73は見込に櫛状工具による簡略化された草花文と点描文を有する。外面底部のみ釉を搔き取り、復元底径5.0cm。

75は陶器椀であるが、龍泉窯系の米色青磁の小椀である可能性が指摘されている。胎土は黄白色、やや褐色がかった透明釉を高台外面までかける。復元口径9.0cm、復元高台径3.8cm、器高5.0cm。

76は陶器鉢で、胎土に砂粒を多く含み、焼成は堅緻。口縁部内外面にのみ黄褐色の釉をかける。

77は輪羽口で、胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、先端部は溶融して青黒色化している。

78・79は土錘で、77は長さ5.3cm、最大径1.3cm、78は最大径1.1cm。

#### 繩文時代の遺物 (図版16・17、第12・13図)

1～9は精製の浅鉢で、内外面ミガキ調整。1は古闕式で、口縁部でわずかに開き、外面に沈線が巡る。2・3は肩部に明瞭な稜をもって屈曲して口縁部が聞く。比較的明るい白黄褐色を呈する。4～9は黒川式で、4は肩部に稜をもち、5～9は屈曲して開いて、外面に沈線、内面に段あるいは沈線をもつ。8・9は口縁部が比較的長く外反する。10以降は粗製の深鉢。10～13は口縁部で、10は口縁部下でやや屈曲して立ち上がり、11は屈曲して外反、12は緩やかに外反し、13は直口縁となる。14は刻目突帯文土器で、口縁部は直口縁、肩部にはユビ刻みを施す。15～21は胴部で、内外面は全て二枚貝条痕による調整で仕上げる。22～24は底部で、裾が広がり、22は上底となる。

25～27は平基式の打製石鏃だが、27は大きさと剥離が粗いことから未製品と考えられる。25は腰岳系の黒曜石製で、先端部をわずかに欠失し、残存長1.8cm、幅1.3cm、厚0.2cm、重0.7g。26・27は安山岩製。27は長2.8cm、幅1.8cm、厚0.5cm、重2.2g。28は長3.5cm、幅2.1cm、厚0.8cm、重6.1g。

28は二次加工剥片。安山岩製で、長8.2cm、幅4.8cm、厚さ1.2cm、40.7g。

に残る。3点とも高台部以下は露胎で、(復元)高台径は、63から順に4.3cm、6.0cm、6.8cm。66～68は皿。66・67は底部が小さく、66は底部周辺のみ露胎、67は体部下半から削り取っている。68は底部が比較的大きく、この部分のみ釉を搔き取る。66・68は見込に文様があり、草花文であろう。66・67の復元底径は、3.8cm、3.0cm。68は復元口径10.0cm、復元底径5.0cm、器高2.3cm。

69～72は青磁碗で、69～71は龍泉窯系、72は同安窯系。69・71の口縁部はやや外反し、70は直口縁。69内面には草花文、70は割花文がある。72の内面には草花文を描き、外面下半は露胎である。復元高台径4.4

cm。73・74は青磁皿で、73は龍泉窯系、74は同安窯系と思われる。73は見込に櫛状工具による簡略化された草花文と点描文を有する。外面底部のみ釉を搔き取り、復元底径5.0cm。

75は陶器椀であるが、龍泉窯系の米色青磁の小椀である可能性が指摘されている。胎土は黄白色、やや褐色がかった透明釉を高台外面までかける。復元口径9.0cm、復元高台径3.8cm、器高5.0cm。

76は陶器鉢で、胎土に砂粒を多く含み、焼成は堅緻。口縁部内外面にのみ黄褐色の釉をかける。

77は輪羽口で、胎土には3mm以下の砂粒を多く含み、先端部は溶融して青黒色化している。

78・79は土錘で、77は長さ5.3cm、最大径1.3cm、78は最大径1.1cm。

### 3) 小結

山城遺跡群の今回の調査区で検出した遺構は、3列の石垣であった。また、石垣背面の堆積土は縄文時代以降近世までの遺物が出土する包含層となっていた。

石垣は、すぐ北側を流れる現在の那珂川の流れとほぼ平行の東西方向に並び、河川改修が目的の今回の事業に伴う調査範囲の全域に及ぶ。調査区内で延長約70m分を検出し、それらは一部が重複した3列に分かれていた。このうち2号石垣は、I区南東隅部付近からII区東端部で未確認部分も含めて24m分検出し、南東側にさらに調査区外へと延びる。石列は中央部の12~13mは概ね東西流する現在の那珂川に平行するが、東側3~4m部分が南東に湾曲することと、逆にI区西端部で屈曲して西側8m部分は川側にやや開く。東側の湾曲については、その延長に現在の農道があり、現状では道の西側の水田が一段高くなっている。したがって、この湾曲は地形に制約されたものと判断できる。これに対して西側の屈曲部は、北西側に直線的に延びてII区北東隅部の川原石が露出した部分に繋がっていた。またこの部分は、未調査箇所もあるが3号石垣と重複し、両者はほぼ平行しており、間隔は約5mである。未調査部分が多く断言はできないが、2・3号石垣で挟まれた部分は形状から判断すれば、あるいは那珂川へと降りる通路の可能性があるものと考えられる。

確認した石垣は、すぐ北側を流れる現在の那珂川の川岸とは10~15mの距離でこれとはほぼ平行すること、石垣前面が北に向かって低く傾斜しており川原石の露出が見られることなどからも、往時の那珂川の護岸と考えて差し支えないであろう。しかしながら一方で、石垣に使用した石は20~40cm程度の手近な自然石川原石を、1~8段、最大1.1m程度に、比較的乱雑に野面積みしている。また、石列は必ずしも一様ではなく、南側の地形や利用状況に制約を受けたものと考えられたのも先述の通りである。以上のことから、今回確認した石垣は、那珂川に直接面したものであることはほぼ確実と思われるが、大規模な河川改修に伴うものというよりも、耕作等に伴う個人レベルの小規模な築造によるものかと判断できる。

石垣背面の遺物包含層中から少量ではあるが肥前系の磁器が、石間からは第9図78の染付椀等が出土しており、また石垣前面の埋土からは古代以来近世までの多様な遺物が出土しているが、はっきり近代以下ものは確認してていない。いずれも遺構に伴う一次史料とは言えないが、石垣の時期については、近世後期の築造であり、比較的短期間に廃絶されて埋没し、那珂川の川岸はやや北側の現在に近い位置へと移動したものと思われる。



調査風景

## 2. 片島遺跡群

### 1) 調査の概要

片島遺跡群の今回の調査地点は、筑紫郡那珂川町大字山田 1334、1335、1338、1340 に所在する。山城遺跡群の位置から東流する那珂川が、安徳台に遮られるようにして大きく蛇行する直前の位置の右岸に立地し、現地はこれまで水田として利用されてきた。那珂川町教育委員会が平成 26 年 2 月 4・5 日に実施した試掘調査と、九州歴史資料館が同年 12 月 10 日に行なった確認調査の結果に基づいて、1,700m<sup>2</sup>を調査対象地とした。

調査は、用地内で排土を処理する必要性から調査区を縦に二分して、那珂川に面した北西側の暫定堤防の下部にあたる箇所から実施することとした。12 月 15 日から重機によって暫定堤防の南東側への付け替えと表土掘削作業を並行して行った。現地表面から 0.4 ~ 1.0 m 程度掘り下げると、淡褐色砂質土あるいは砂の遺構面を検出したが<sup>6</sup>、調査区の北西側の那珂川に面した箇所では現代の擾乱を多く確認した。平成 28 年 1 月 6 日から作業員による遺構検出作業、掘削作業を開始し、記録作業まで終了した 2 月 5 日に足場を組んでの全体写真撮影を行なった。2 月 9 日から再び重機を投入して暫定盛土と排土の移動と南東半部の表土掘削作業、2 月 23 日から手作業による遺構検出作業および掘削作業を実施した。3 月 3 日には上空からの全体写真撮影を行い、記録作業も含めた全ての調査を終えて、17 日から埋め戻し作業を行なった。



第 14 図 片島遺跡群調査区位置図 (1/5,000)



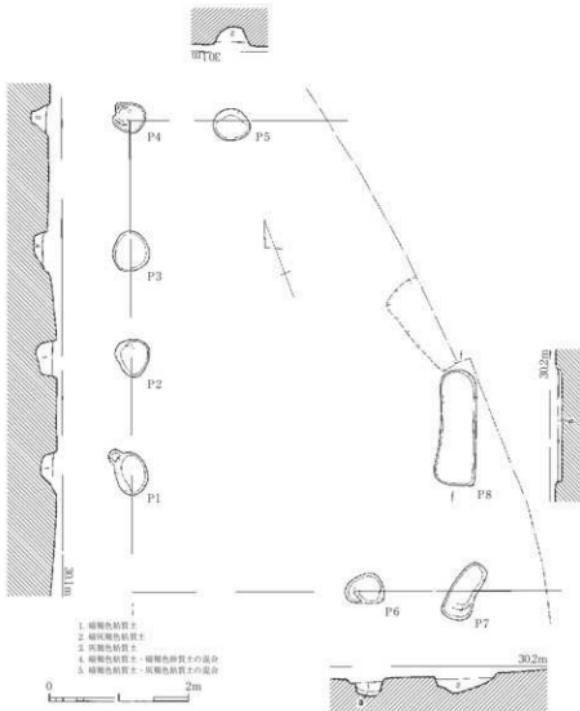
第15図 片島遺跡群遺構配置図 (1/300)

## 2) 遺構と遺物

### 掘立柱建物跡

#### 1号掘立柱建物跡（図版 20・21、第16図）

調査区の北東端部で検出した。柱痕跡は確認できず、また埋土の状況からも、現地では掘立柱建物跡でない可能性も高いものと考えられた。しかしながら、遺構の配置から判断して、ここでは掘立柱建物跡として報告する。建物は4間×3間以上の規模で、さらに東側に調査区外に延びるものと考えられる。南西隅部とその東の2箇所の柱掘方は削平され失われたものであろう。検出した柱掘方は7箇所で、P1～P6は径50～60cmの平面円形あるいはやや楕円形で、深さ25～30cmが残存する。P7は長軸長90cm、短軸長35～40cmの平面長方形で主軸は柱列の方向に対し斜めとなり、最大部で深さ25cm。柱痕跡は、先述の通り平面観察でも断ち割り調査でも検出し得なかった。柱間は、1.4～1.85mと、ばらつきがある。P8は、位置と主軸の方向、埋土の状況から判断して建物と一連の遺構であると考えられ、西側のP1・P2に対応する柱掘方と考えられなくもないが、遺構の形状からは建物内の土坑とすべきかと思われる。長軸長165cm、短軸長50～60cm、深さ10cmで、底面はほぼ平らである。



第16図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

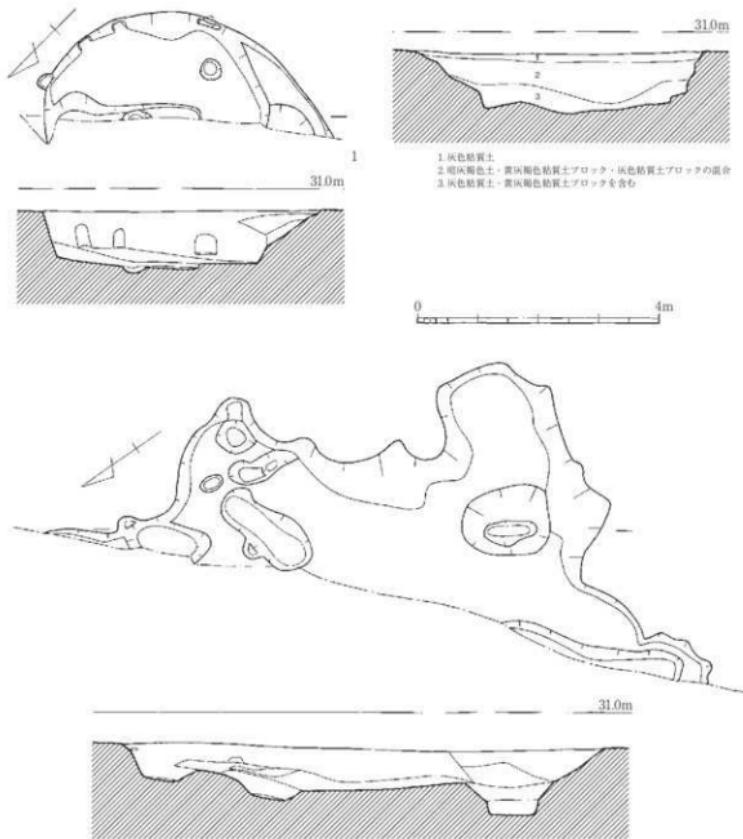
### 出土遺物（図版 23、第 18 図）

1 は、P 2 の埋土から出土した。手捏ねの鉢形の土器。胎土は精良で、焼成はやや軟質、外側はナデて仕上げ、内面には粗い抑え痕が残る。器壁は厚く、底は比較的平らである。口径は復元すれば 7 cm 程度、底径 3.1cm、器高 5.0cm

### 土坑

#### 1 号土坑（図版 21、第 17 図）

調査区中央部付近の西北調査区境で検出し、遺構の一部は川側の調査区外に延びる。埋土はブロック状の土の混合土を中心で、新しい印象を受けた。確認した平面形は半円形で、長径 3.6 m。深さは 0.6 m 程度で底面は水平に近いが、若干の凹凸がある。周壁は、南西側につ



第 17 図 1・2 号土坑実測図 (1/60)

いては底から 0.2 m の位置で段を持って上方はやや緩やかに立ち上がるが、それ以外の面は垂直に近い急傾斜となる。

#### 出土遺物（図版 23、第 18 図）

2 は弥生土器甕で、鋤先口縁のもの。

3 は土師器皿で、底部は糸切り、復元底径 6.0cm。

4・5 は同安窯系の青磁碗。4 は口縁部下でやや屈曲し、内面はこの位置に沈線が巡り、外面はここに櫛目文が確認できる。5 は体部下半と思われ、外面は縦方向の櫛目文、内面には点描文を描く。

6 は磁器瓶の頸部であろう。胎土は灰白色で、透明釉をかける。

7 は無釉陶器の壺の肩部であろうか。焼成は堅緻で内外面は小豆色を呈する。

#### 2 号土坑（図版 22、第 17 図）

調査区南西隅部近くで検出し、遺構の一部は川側の調査区外に延びる。埋土は灰色土、淡褐色土、灰褐色土の混合土で、新しい印象を受けた。検出した範囲の平面形は不整形で、調査区境の大部分で長さ 8.5 m、残存幅 3.1 m。深さは 0.3 ~ 0.5 m 程度だが、底面に土坑状の凹凸をいくつもつ。

#### 出土遺物（図版 23、第 18 図）

8・9 は弥生土器甕で、2 点とも鋤先口縁のもの。8 は口縁部下に断面三角突帯があり、丹塗りである。

10 は土師器甕で、口縁部は薄く外反し、胴部内面は横方向のケズリ調整。11 は土師器碗で、外面の口縁部下はケズリ調整で、内外面をミガキ調整で仕上げる。

12~15 は須恵器で、12~14 は蓋。12・13 は天井部に摘みがあり、13 は焼成がやや軟質である。14 は口縁部の下面にかえりを有する。15 は碗で、内外面ヨコナデ調整。

16 は瓦質土器鉢で片口を持ち、内外面にハケメ状の調整痕が残る。

17 は肥前系の染付であるが、高台が復元径 5.2cm と小さく、底部が平らであり、湯飲み碗あるいは蓋物等であろうか。見込には文様を描く。

18 は陶器皿で、内外面に銅緑釉をかける。

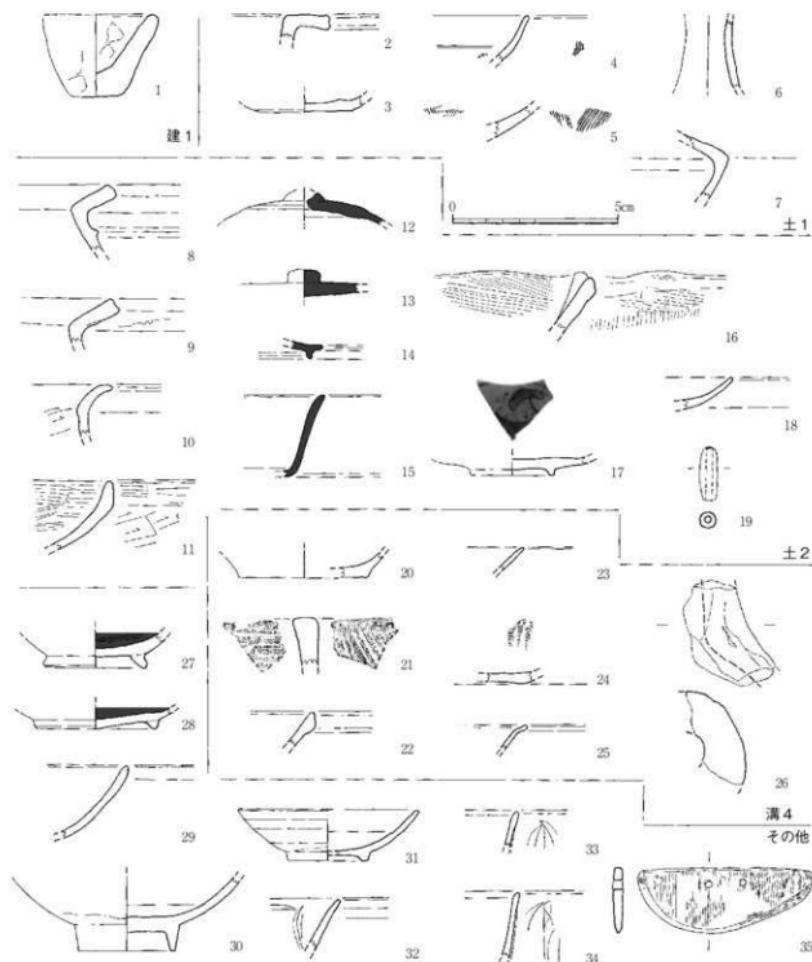
19 は土鍤で、長さ 3.1cm、最大径 1.1cm。

#### 溝（図版 19・20・22、第 15 図）

調査区の南西半部でやや密集して検出した。全体的に直線的で、東西あるいは南北の方位に概ね合致する。1・5 号溝は途中で直角に屈曲しており、全体に何らかの区画溝であろうと考えられる。埋土は 1・3・4 号溝が暗褐色粘質土、2・5 号溝は灰白色細砂質土で、いずれもほぼ 1 層であった。

#### 1 号溝

川側の調査区境から直線的に東に 14 m 延び、ほぼ直角に屈曲して南に 10.5 m 延びて途切れる。幅 70 ~ 80cm、深さは 5 ~ 40cm で屈曲部付近が深い。2 号溝を切る。



第18図 片島遺跡群出土遺物実測図① (1/3)

## 2号溝

ほぼ直線的な南北溝で、北端部付近で1号溝に切られる。全長25m、幅は北端部付近では約30cmと狭く、それ以外の箇所は70~80cm。深さは10~40cm程度で、中央部付近が低い。

## 3号溝

ほぼ直線的に南北に延びる。全長14m、幅は100~180cmで、一部形状が乱れる。深さ10~30cm程度で、中央部付近がやや深い。遺構の南側で3号溝と合流しており、両者に切合い関係があるかは断面土層観察でも不明であった。

## 4号溝

3号溝に隣接して西側にあり、南半部の一部で3号溝と合流する。川側の調査区外にさらに延び、平面形状は北半部と南端部付近で大きく乱れるが、本来南北方向の溝であろう。現存長13m、深さは最大部で40cm程度。

### 出土遺物（図版23、第18図）

20は土師器壺で、底部は糸切り、復元底径8.0cm。

21は瓦質土器の鉢であろうか。ハケメ状の調整を、外面は斜め方向、内面は横方向に施し、焼成は良好で、外面は黒灰色を呈する。

22は白磁椀で、玉縁口縁のもの。23は釉が緑灰色に発色しているが、白磁であろう。椀等の口縁部で、直口縁となる。

24は同安窯系の青磁皿で、見込に櫛状工具による点描文があり、底部のみ露胎となる。

25は陶器皿で、器壁は薄く、口縁部に平坦面をもち端部を跳ね上げ、内外面に藁灰釉を施す。

26は繩羽口で、基部付近で形状が大きく開く。

## 5号溝

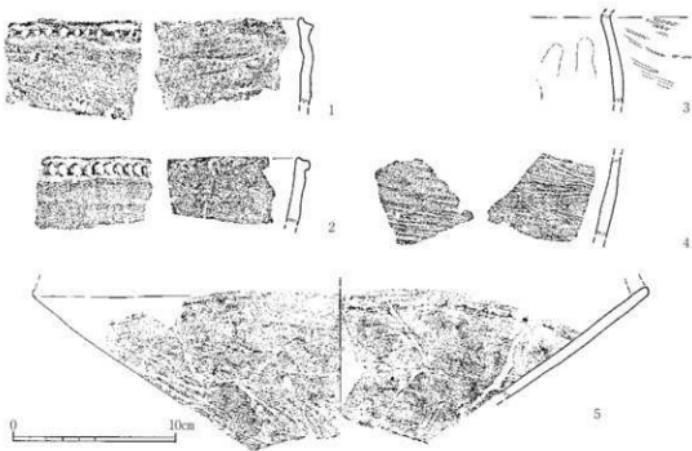
調査区西隅部付近から東に部分的に途切れるが直線的に17.5m延び、ほぼ直角に南に折れて3.5mの箇所で途切れる。幅は一定せず最大部で90cm程度、深さ20~25cmである。屈曲部の約5m西側から溝の内側に沿って、水が溢れた痕跡のように5~10cm程度の浅い掘り込みがあり、南側調査区外にまで延びている。

## 6号溝

溝の一部が調査区外に延びるやや湾曲した東西溝で、5.5m分を確認した。幅60~100cmで、深さ10~25cm。

### 縄文時代遺物（図版24、第19図）

1・2は、刻目突帯文土器で、1はV字刻み、2はヘラ刻み、また1の外面には煤状の付着物がある。3は上部が屈曲して開き、外面ミガキ調整、内面ナデ調整。4は内外面二枚貝条痕が残り、外面には煤が付着している。5は肩部で明瞭な稜をもつて屈曲する。外面は二枚貝条痕の後粗いミガキ調整、内面は比較的密なミガキ調整で仕上げる。



第19図 片島遺跡群出土遺物実測図② (1/3)

#### その他の出土遺物（図版23・24、第18図）

27・28は黒色土器で、ともに内面のみ撲す。27は復元高台径6.4cm、28は高台が低く復元高台径7.6cm。また、27は瓦質に焼成される。

29は瓦器椀で外面は黒灰色、内面は灰色に発色する。

30は白磁椀。高台は高く、露胎である。内面は体部と見込の間に沈線が巡るが、この周辺に列状に砂が付着している。復元高台径6.0cm。

32～34は青磁椀で、32は内面に劃花文、33・34は外面に鏽蓮弁文がある。

35は石包丁で、完形品、灰色の粘板岩製である。刃部が湾曲し、片側が使用によるものか幅狭くなっている。この部分に横方向の擦痕が多く残る。孔は2箇所とも径4mmで、片側から穿孔したものであろう。全長10.7cm、幅4.0cm、厚さ0.6cmで、35.2g。

#### 3) 小結

片島遺跡群の今回の調査区で検出した主な遺構は、掘立柱建物跡1棟、大型の土坑2基以上、溝6条以上等である。掘立柱建物跡は、調査区北東隅部付近で検出したが、周囲に関連する遺構もなく、出土した遺物も手捏ねの土器1点であった。遺構の時期および性格等は不明と言わざるを得ない。調査区の南西半部で検出した溝は、直線的であり、東西あるいは南北の方位に概ね合致し、一部で溝同士の切り合いも見られるが、配置に規則性も窺える。何らかの区画溝であろうと判断できた。2号土坑等も形状は不整形ではあるが、これらの溝の区画と矛盾していないようにも見える。溝、土坑から出土した遺物は決して多くはない、しかも時期的に縄文時代晩期から近世までのものを含んでいるが、第18図6・17・18・25等の陶

磁器から判断して、近世後期以降の遺構であろうと考えられる。調査範囲で確認し得た資料は少なく、遺構の同時性も含めて、性格に言及することは困難であろう。



調査風景

#### IV おわりに

今回の山城遺跡群・片島遺跡群の調査は、那珂川床上浸水対策特別緊急事業に伴っており、河道掘削、護岸工、築堤工等の河川整備を行うもので、調査対象地は那珂川右岸であった。

山城遺跡群では川に沿った護岸の石垣を、片島遺跡群では川岸でありながらもこれとは方向の違う東西南北の方位を基準とした区画を検出した。山城遺跡群は、北流する那珂川が丘陵に遮られて東に屈曲する付近にあたり、石垣背面に遺物包含層が厚く堆積していることからも、また確認した石垣にも水流による崩れが認められることからも、絶えず氾濫の危険に晒されてきた土地といえよう。一方の片島遺跡群は北東流する那珂川が安徳台の丘陵の手前で大きく蛇行する直前の位置にあたり、条件的には大差無いようでもあるが、調査の結果でも氾濫の痕跡は見当たらなかった。両遺跡の推定された時期には大差がない。

那珂川流域では、昭和以降に限っても度数にわたる洪水被害が発生しており、それが今回の事業の背景である。そうしたなかで、山城遺跡群と片島遺跡群はともに那珂川右岸に位置し、これまで水田として利用されており、直線で500m程の距離にあるが、二者二様の土地利用の在り方を呈していることは興味深い。



# 図 版





1 山城遺跡群遠景  
(西上空から)



2 山城遺跡群全景  
(上空から)



1 トレンチ掘削状況  
(西上空から)



2 1 トレンチ上半部  
(北から)



3 1 トレンチ上半部土層  
(北から)

1 1 トレンチ下半部土層  
(西から)



2 2・3号トレンチ  
(上空から)



3 2 トレンチ土層 (北から)





1 2 トレンチ石垣周辺土層  
(西から)



2 3 トレンチ (北東から)



3 3 トレンチ土層 (北西から)



1 3 トレンチ石垣周辺土層  
(北西から)



2 4 トレンチ (北から)



3 4 トレンチ土層  
(北西から)



1 4トレンチ石垣前面土層  
(北西から)



2 4トレンチ石垣背面土層  
(南西から)



3 4トレンチ石垣周辺土層  
(東から)



1 石垣全景（東上空から）



2 石垣全景（北上空から）



3 1・2号石垣  
(北上空から)



1 1号石垣（北から）



2 3号石垣東半部（北上空から）



3 3号石垣西半部（北上空から）



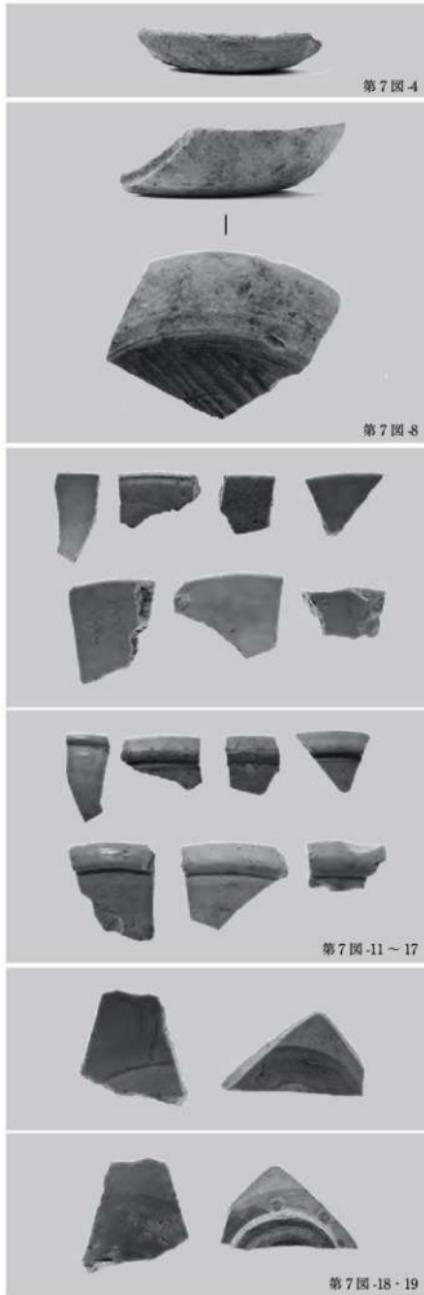
1 I 区拡張部 2号石垣  
(北西から)



2 I 区拡張部 2号石垣  
(北東から)



3 II 区拡張部 2号石垣  
(東から)



第7図-4

第7図-8

第7図-11～17

第7図-18・19



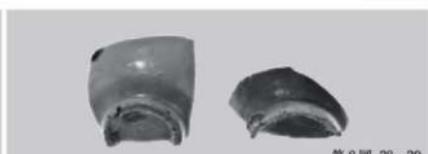
第7図-20～23

第7図-24～27

第7図-28



第7図-29～31



第8図-38・39



第8図-32



第8図-40



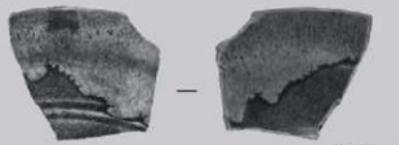
第8図-41・42



第8図-33・34



第8図-43



第8図-44



第8図-45



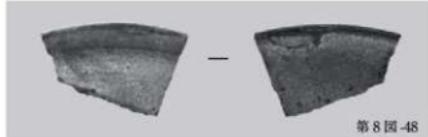
第8図-37



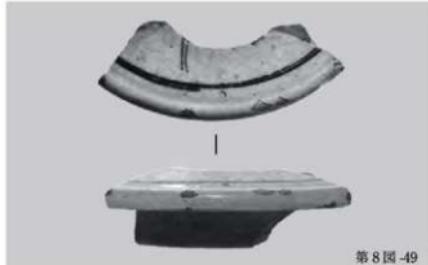
第8図-46



第8図-47



第8図-48



第8図-49



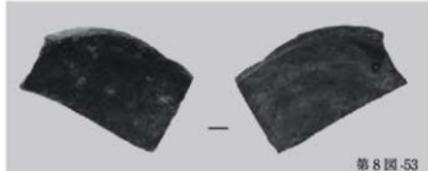
第8図-50



第8図-51



第8図-52



第8図-53



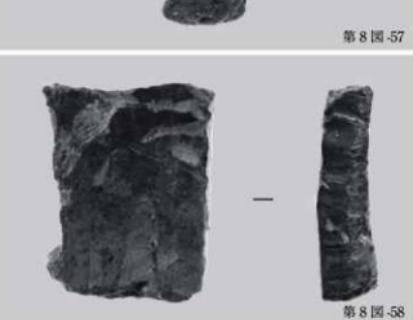
第8図-54



第8図-55



第8図-56



第8図-57



第8図-58



第9図-59



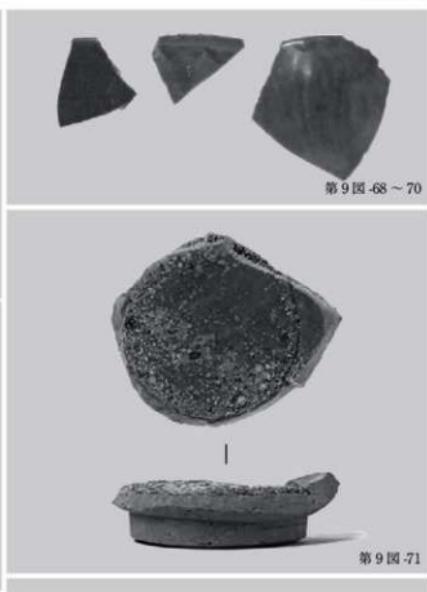
第9図-60



第9図-68～70

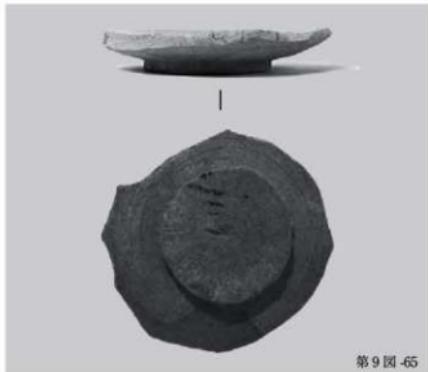


第9図-61～64

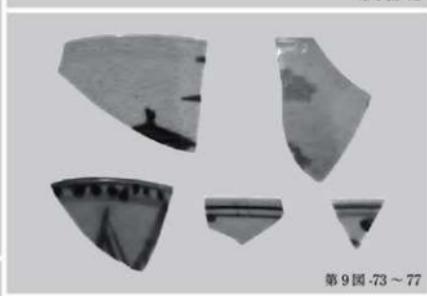


第9図-71

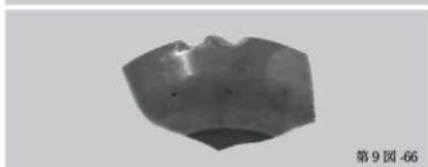
第9図-72



第9図-65



第9図-73～77



第9図-66



第9図-78



第9図-67



第9図-80・81



第9図-80・81



第9図-84・85



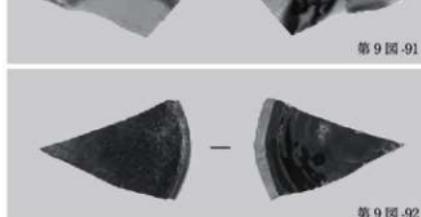
第9図-86～88



第9図-89・90



第9図-91



第9図-92



第10図-1



第10図-2



第10図-5



第10図-6・7



第10図-8・9



第10図-10



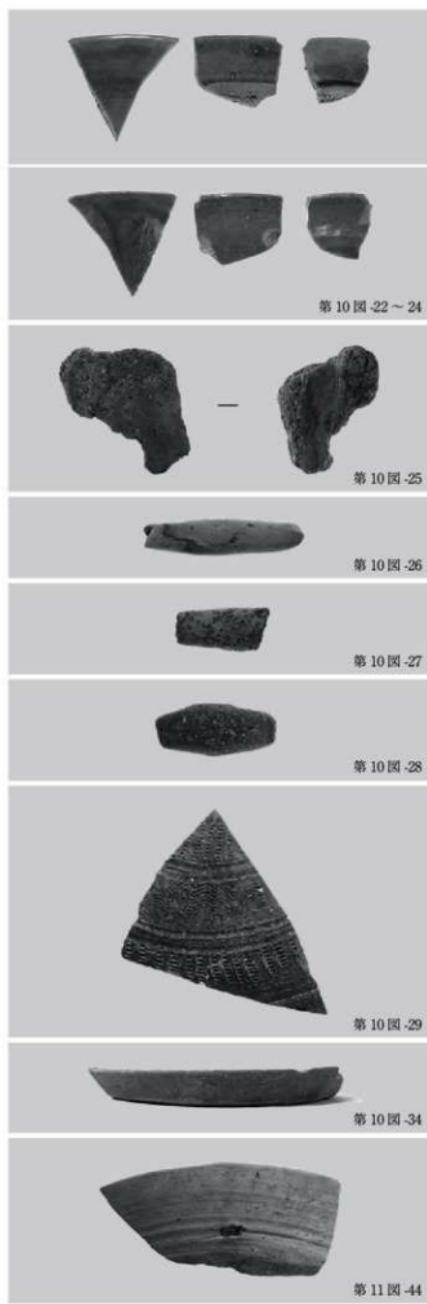
第10図-14



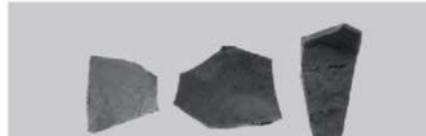
第10図-18

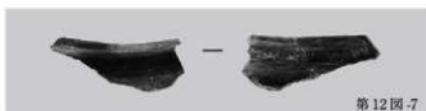


第10図-20・21



山城遺跡群出土遺物⑥





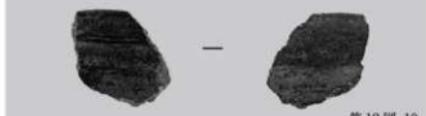
第12図-7



第12図-8



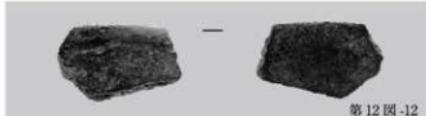
第12図-9



第12図-10



第12図-11



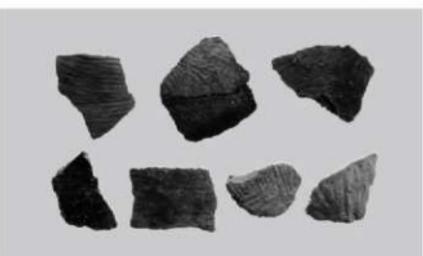
第12図-12



第12図-13



第12図-14



第12図-15～21



第12図-22



第12図-23



第12図-24



第12図-25～27



第13図-28



1 片島遺跡群遠景  
(南東上空から)



2 片島遺跡群遠景  
(東上空から)



1 北西部全景（南西から）



2 北西部全景（北東から）



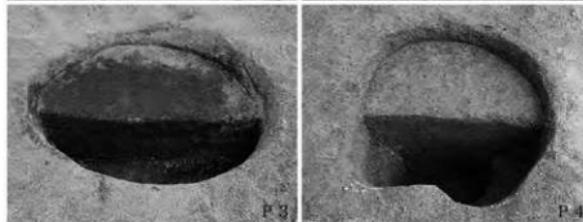
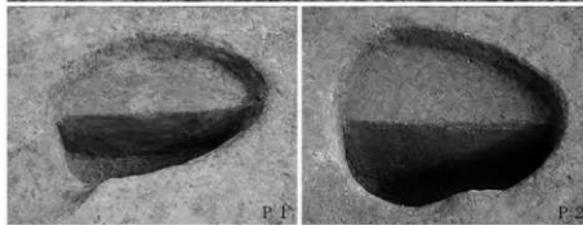
3 南東部全景  
(南西上空から)



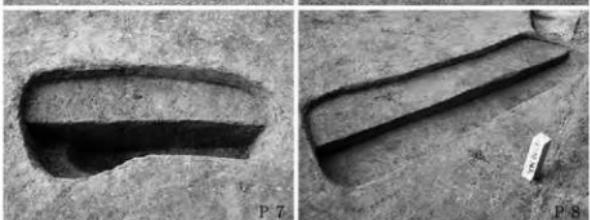
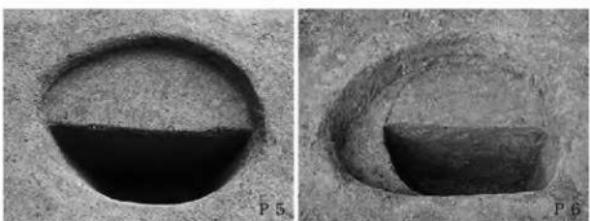
1 南東半部全景  
(北西上空から)



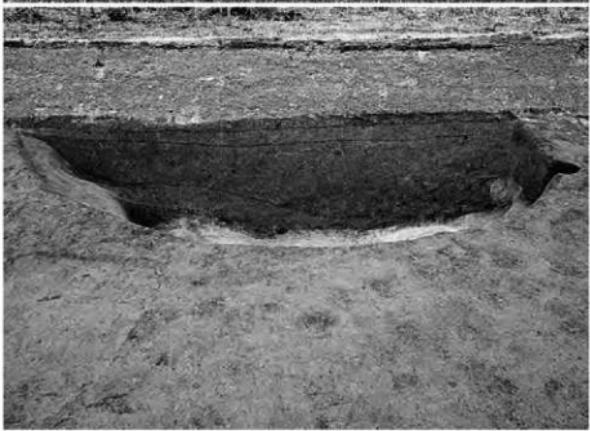
2 1号掘立柱建物跡  
(南西上空から)



3 1号掘立柱建物跡柱掘方  
土層①



1 1号掘立柱建物跡柱掘方  
土層②、P 8



2 1号土坑（西から）

3 1号土坑土層（北西から）



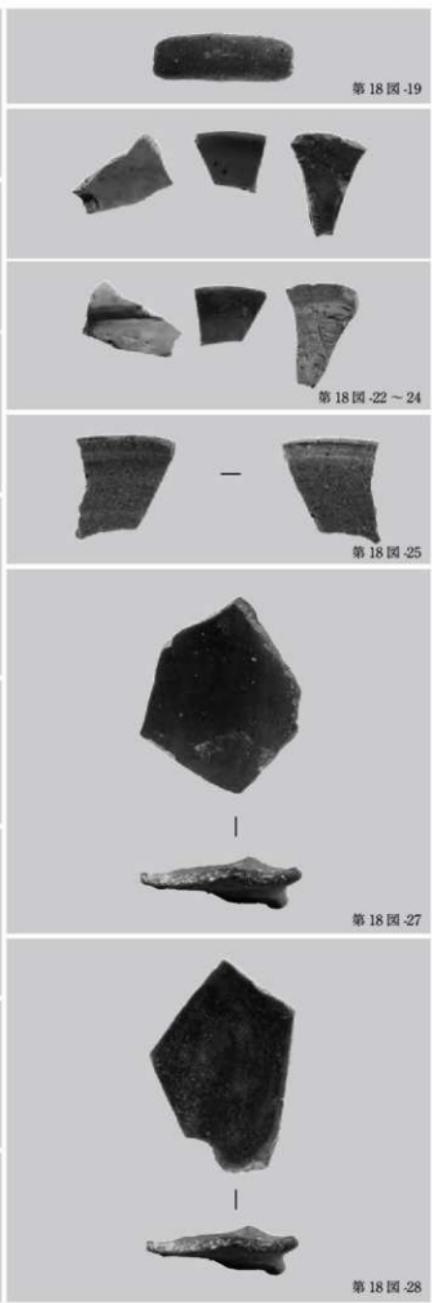
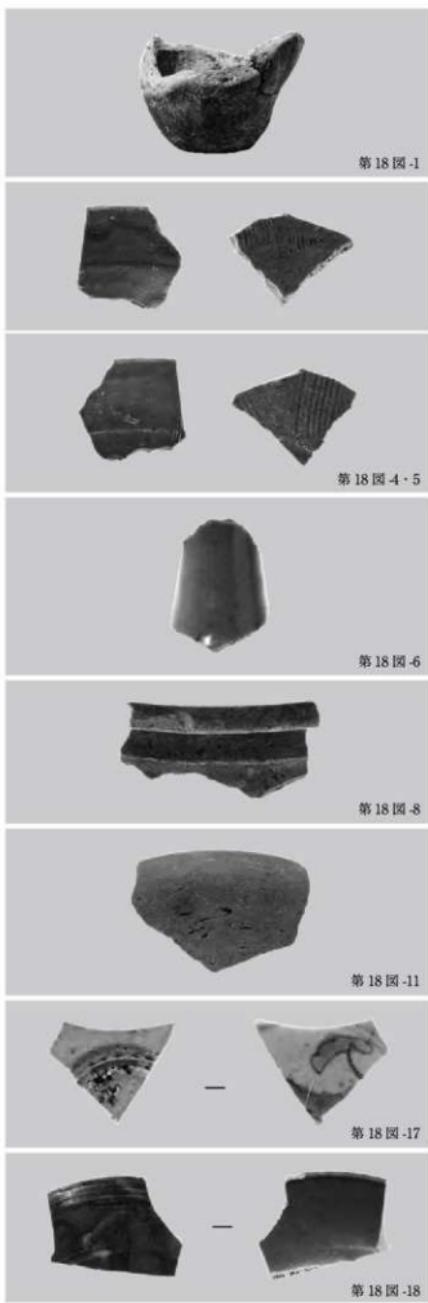
1 2号土坑（北から）



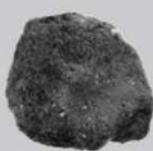
2 2号土坑土層（南から）



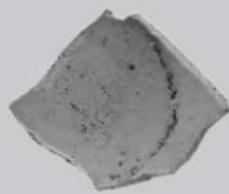
3 2~4号溝（北から）



片島遺跡群出土遺物①



第18図-26



—



第18図-30



第18図-31



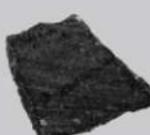
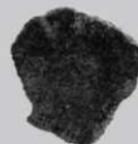
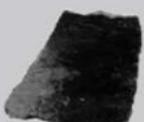
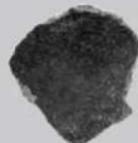
第18図-32～34



第18図-35



第19図-1・2



第19図-3・4



第19図-5

報 告 書 抄 錄

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 29	登録番号 7

那珂川床上浸水対策特別緊急事業関係埋文化財調査報告  
山城遺跡群 片島遺跡群  
福岡県文化財調査報告書 第266集  
平成30年3月31日  
発行 九州歴史資料館  
〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3  
印刷 福岡印刷 株式会社  
〒812-0892 福岡市博多区東那珂1-10-15